京都旅

向田邦子

新潮文庫

家族熱

新潮文庫　む－3－7

昭和六十一年一月二十五日　発行
平成　元　年十二月二十日　二　刷

著者　向田邦子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六—五一一一
編集部(〇三)二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Sei Mukouda 1982　Printed in Japan

ISBN4-10-129407-0 C0193

新潮文庫

家族熱

向田邦子著

新潮社版

3555

家

族

熱

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

●本文中の記号の意味は左記の通りです。
SE（音響効果）　F・O（ゆっくり消えていく）　N（ナレーション）

●スタッフ

制作	大山　勝美
プロデューサー	鈴木　淳生
演出	服部　晴治
	福田　新一
テーマ音楽	ローズマリー・クルーニー
	「クローズ・ユアー・アイズ」より
音楽	告井　延隆

●主なキャスト

黒沼　謙造	三国連太郎
黒沼　朋子	浅丘ルリ子
黒沼　杉男	三浦　友和
黒沼　竜二	田島　真吾
黒沼　重光	志村　喬
片桐　恒子	加藤　治子
島田　泉	風吹ジュン
梅沢　時子	吉行　和子
門倉　孝輔	伊藤　孝雄
尾崎　松子	宝生あや子
根岸むつ子	中原　京美
玉木　専務	河村　弘二
玉木　洋子	中川　七瀬

家族熱
東京放送で14回連続放映
昭和53年7月7日～10月6日

1

●**タイトル・バック**

「ブラームスの子守唄」（ローズマリー・クルーニー唄）をバックに、黒沼家二十七年の歳月を示す家族の記念写真・スナップ。

謙造と前妻恒子（つねこ）の結婚式。

長男杉男のお宮詣（まい）り。

長男におっぱいをのませる恒子。

長男杉男と次男竜二の七五三（恒子と）。

十歳の杉男と母に甘える六歳の竜二のスナップ。

祖父重光、祖母かね、謙造、長男、次男そして生まれたばかりの長女を抱いた恒子。

写真を引きはがしたあとの空白のアルバムがめくられて――。

謙造と新しい妻朋子（ともこ）の結婚式。

祖母の葬儀。

鯨幕（くじらまく）の前にならぶ重光、謙造、朋子。

成人した杉男と竜二。

竜二だけがそっぽを向いている。

●**黒沼家・表**（早朝）

蝸牛（かたつむり）が「黒沼謙造」の表札の上を、ゆっくり這（は）っている。
雨上りの夏の朝。
タクシーが停る音。ドアを開閉して、走り去ってゆく。
黒沼杉男（26）が、精魂尽き果てたという感じで帰ってくる。
ポストから、二、三種の朝刊を抜き取り大きな牛乳ビンを抱えて、ドアの前へ。
ポケットから鍵（かぎ）を出し、ドアを開ける。
ギイッときしむドア。
入りかけて牛乳ビンを落してしまう。
烈しい音、飛び散る白濁した液体。

●夫婦の部屋（早朝）

ベッドで目をあける朋子（33）起き上ろうとする。
かたわらに眠る夫の謙造（50）。
目を閉じたまま、朋子に腕を廻す、朋子、振りほどいて起きてゆく。

●玄関（早朝）

大きなガラスの破片を始末している杉男。
浴衣の衣紋（えもん）をつくろいながら、階段をかけおりてくる朋子の素足。

寝乱れた髪。年よりやつれてみえる素顔がかえってなまめかしい。
杉男「ただいま」
朋子「――やりつけないこと、するから――みなさい」
朋子、杉男の手から割れたガラスを取りながら、
朋子「手術、うまく行かなかったの」
杉男「手術はうまく行ったンだけどね、意識戻らないのが一人いて」
朋子「女？」
杉男「男」
朋子「ずっとついてたの？」
杉男「――ポカッと目開いて、『本当に手術終ったんですか？　今、何時？』――みんな不思議に同じこと聞くなあ」
あくびをしながら片づけようとする杉男をとめて、
朋子「いいから寝なさい」
杉男「うん」
朋子「何時まで寝られるの」
杉男「オペ、十一時から……九時」
朋子「起してあげるから（言いかけて）――あら」
杉男「――」

朋子「徹夜すると、杉男さんでも、ヒゲ、伸びるのね」
杉男「――」
　杉男、階段を上りかけて、
杉男「お母さん」
朋子「？」
杉男「ほどけてる――」
　あわてて締めた半巾帯がほどけかけている。
　ゆっくり上ってゆく杉男。
杉男（N）「母と呼んだが、母ではない。血のつながりのないこの人を母と呼ぶようになったのは、十三年前からだ」
　ガラスの破片を片づける朋子。

●杉男の部屋（早朝）

杉男（N）「この人を母と呼ぶことで家に新しい平安がくる、そう思って呼んだ時期もある。僕と弟をおいて家を出て行った生みの母に、別れの言葉をたたきつける代りに、そう呼んだ時期もあった。今は違う。七つも年の違わないこの人を、母と思いたくない、そういう気持をいじめるために、わざとお母さんと呼んでいる」
　ベッド・カバーもめくらず倒れ込む杉男。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

枕もとに麻酔関係の医学専門書。

●夫婦の部屋（朝）

窓をあける朋子。
レースのカーテンが風でゆれ、小鳥の声が一斉に入ってくる。
ベッドで薄く目をあける謙造。
朝の身仕舞をする朋子。

謙造「杉男、帰ってきたのか」
朋子「もうくたくた。一日に三つも手術なんて、人間の限界、越えてますよ」
謙造「手術ったって、奴が執刀するわけじゃなし」
朋子「あら、執刀医より麻酔医の方が、料金だって保険の点数だって高いんですってよ」
謙造「奴のことになると、くわしいな」
朋子「あなたは何にも話して下さらないもの。何とか大橋を掛ける工事の入札をどうとか、ぐらいで」
謙造「うちの人間に仕事のはなししてるうちは、男も半人前だよ」
朋子「――じゃあ、竜二さんは立派な一人前ってわけね」
謙造「――」
朋子「全然しゃべらないもの。

勉強さぼってアルバイトばっかりして――それも、何のアルバイトしてるか、ひとことも言わないのよ」

謙造「そういう年頃なんだよ」

朋子「本当の母親だったら、こうじゃないわ」

謙造「いやあ、もっと、言わないね」

謙造、妻の機嫌を取るように、妻に触れる。

朋子、さっと枕を引っぱり、枕カバーをはがす。

●竜二の部屋（朝）

若い母に抱かれオッパイをのんでいる赤んぼうの写真。

ヨウカン色に変色した小さな写真。

ベッドにねそべって見ている竜二。

SE　ノックの音

朋子「竜二さんあけるわよ」

すばやくサイド・テーブルの引出しに仕舞う竜二。

ドアをあける朋子。ベッドに、裸でうつ伏せになっている竜二。

朋子「竜二さん、ぼつぼつ起きて――」

言いかけて、裸体の竜二に気づき、少しひるむ。

が――全然気にしていないといった感じで、
朋子「みんなと一緒にごはんすませてくれないと、片づかなくて、あと、お母さん大変なのよ。ね。それから、シーツと枕カバー、とりかえるから、出しといて」
身動きをしない竜二。
朋子「判ったの、竜二さん！　枕カバーと」
言いかける朋子の口をふさぐように、朋子にパンヤの大きな枕をほうりつける竜二。朋子、そんなことは朝メシ前という感じで、パッと受ける。
朋子「ナイスキャッチ！」

●重光の部屋（朝）

青竹を踏んでいる老人の素足。重光（72）である。
朋子がくる。
重光「一、二、一、二」
朋子「おはようございます」
重光「一、二、一、二」
朋子「おじいちゃま、シーツと枕カバー」
シーツと枕カバー、浴衣のわきに、たたんである。
朋子「いただいてきます」

重光「その、縞の半袖な、あしたまでにたのむ」
朋子「あした、ですか」
重光「これが一番、似合うって言うんだよ。糊、きつめにな」
朋子「はい――」
重光「一、二、一、二」
　朋子、持って出る。廊下でシャツの胸に何か入っているのに気づく。とり出すと定期入れ。
　老婦人の写真（尾崎松子62歳）人品のいい行き届いたやや権高な感じ。重光の青竹を踏む（一、二、一、二）声がダブる。
謙造（声）「茶飲み友達だろう」
朋子（声）「でも、ここのところ、毎日逢っているみたいよ。尾崎さん尾崎さんて、おじいちゃま、夢中ですもの」

●洗面所（朝）

　夫のガウンをたくし上げたりして世話をやく朋子。
朋子「――おじいちゃま、このうちに入れるつもりじゃないのかしら」
謙造「うちに入れる？」
朋子「正式に――（再婚）」
謙造「おい」

朋子「もいっぺん、お姑さんの苦労するのかなあ」
謙造「冗談じゃないよ」
庭の方から、ゴルフのボールを打つ音。

●庭（朝）

クラブを振って、ひもにつけたボールを打っている重光。

●杉男の部屋（朝）

ボールを打つ音を聞いている。目を開いて天井を見ている杉男。
杉男（N）「こういうときは体中が耳になったように、家中の音が聞こえてくる。確かにこの家には問題がある。じいちゃんは老いらくの恋を始めたし、おやじは橋の入札のことしか考えていない。弟のつっかかる態度は益々烈しくなっている。しかし、完全無欠の健康体というものがないように、完全な家庭というものもあるはずがない。コーヒーのにおいが流れてくる。まずは平和な家庭の朝だ」
朋子（声）「おじいちゃま！　竜二さん！」

●洗面所（朝）

謙造がひげを剃ろうとしている。朋子が朝の食卓を整えている気配。

朋子（声）「竜二さん！　ごはんよォ、起きて頂戴！」
　重光が鼻唄まじりに割り込んで、謙造を押しのけるように手を洗う。
謙造「つきあうのもいいけれど――年、考えて」
重光「え？」
謙造「茶飲み友達でとめといたほうが」
　重光、みなまで言わせず反撃に出る。
重光「あ、あぶない橋、渡ってるんじゃないのか」
謙造「え、そりゃ橋の入札じゃ苦労してるけど、別にアブなかァないよ」
重光「そのはなしじゃない。――逢っているんじゃないのか」
　重光、湯気で曇った鏡に、「恒子」と指で書く。
　消そうとする謙造。
　消させまいとする重光。
　うしろを通りかかる朋子。
　二人の男、泡食って消す。
謙造「馬鹿馬鹿しい。朝っぱらから何をいうかと思えば、第一、居所も知らない人間（言いはる）」
重光「大阪の『つる川』という料亭で、仲居頭をしとるそうじゃないか。知らんこと、あるまい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com